



鼻 (**hana**)

Akutagawa, Ryūnosuke

Published: 1916

Categorie(s): Fiction, Humorous, Religious, Short Stories

Source: http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/42_15228.html

About Akutagawa:

芥川 龍之介（あくたがわりゅうのすけ、1892年3月1日 - 1927年7月24日）は、日本の小説家。号は澄江堂主人、俳号は我鬼を用いた。その作品の多くは短編で、「芋粥」「藪の中」「地獄」「車」など、『今昔物語集』『宇治拾遺物語』などの古典から題材をとったものが多い。

「蜘蛛の糸」「杜子春」など、童話も書いた。1927年7月24日未明、友人にあてた遺書に「唯ぼんやりした不安」との理由を残し、服毒自殺。

35歳という年齢であった。後に、芥川の業績を記念して菊池寛が芥川龍之介賞を設けた。戒名は懿文院龍之介日崇居士。Ryūnosuke Akutagawa (芥川 龍之介, Akutagawa Ryūnosuke) (March 1, 1892 - July 24, 1927) was a Japanese writer active in Taishō period Japan. He is regarded as the "Father of the Japanese short story", and is noted for his superb style and finely detailed stories that explore the darker side of human nature. (source: Wikipedia, English/日本語)

Also available on Feedbooks for Akutagawa:

- 羅生門 (*rashoumon*) (1915)
- 藪の中 (*yabu no naka*) (1922)

Copyright: This work is available for countries where copyright is Life+70 and in the USA.

Note: This book is brought to you by Feedbooks

<http://www.feedbooks.com>

Strictly for personal use, do not use this file for commercial purposes.

鼻

禅智内供（ぜんちないぐ）の鼻と云えば、池（いけ）の尾（お）で知らない者はない。長さは五六寸あって上唇（うわくちびる）の上から？（あご）の下まで下っている。形は元も先も同じように太い。云わば細長い腸詰（ちょうづ）めのような物が、ぶらりと？のまん中からぶら下っているのである。

五十？を越えた内供は、沙弥（しゃみ）の昔から、内道場供奉（ないどうじょうぐぶ）の職に陞（のぼ）った今日（こんにち）まで、内心では始終この鼻を苦しんで来た。勿論（もちろん）表面では、今でもさほど？にならないような？をしてすましている。これは？念に当来（とうらい）の？土（じょうど）を？仰（かつぎょう）すべき僧侶（そうりよ）の身で、鼻の心配をするのが？いと思ったからばかりではない。それよりむしろ、自分で鼻を？にしていると云う事を、人に知られるのが嫌だったからである。内供は日常の談話の中に、鼻と云う語が出て来るのを何よりも惧（おそ）れていた。

内供が鼻を持てあました理由は二つある。——一つは？際的に、鼻の長いのが不便だったからである。第一飯を食う時にも独りでは食えない。独りで食えば、鼻の先が錠（かなまり）の 中の飯へとどいてしまう。そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食う間中、？さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げていて貰う事にした。しかしこうして飯を食うと云う事は、持上げている弟子にとっても、持上げられている内供にとっても、決して容易な事ではない。一度この弟子の代りをした中童子（ちゅうどうじ）が、嚏（くさめ）をした拍子に手がふるえて、鼻を粥（かゆ）の中へ落した話は、当時京都まで喧伝（けんでん）された。——けれどもこれは内供にとって、決して鼻を苦しんで来た重（おも）な理由ではない。内供は？にこの鼻によって傷つけられる自尊心のために苦しんだのである。

池の尾の町の者は、こう云う鼻をしている禅智内供のために、内供の俗でない事を仕合せだと云った。あの鼻では誰も妻になる女があるまいと思ったからである。中にはまた、あの鼻だから出家（しゅつけ）したのだろうと批評する者さえあった。しかし内供は、自分が僧であるために、幾分でもこの鼻に煩（わずらわ）される事が少なくなったと思っていない。内供の自尊心は、妻？と云うような結果的な事？に左右されるためには、余りにデリケートに出来ていたのである。そこで内供は、積極的にも消極的にも、この自尊心の毀損（きそん）を恢復（かいふく）しようと試みた。

第一に内供の考えたのは、この長い鼻を?際以上に短く見せる方法である。これは人のいない時に、鏡へ向って、いろいろな角度から?を映しながら、熱心に工夫（くふう）を凝（こ）らして見た。どうかすると、?の位置を換えるだけでは、安心が出来なくなって、?杖（ほおづえ）をついたり頤（あご）の先へ指をあてがったりして、根?よく鏡を覗いて見る事もあった。しかし自分でも?足するほど、鼻が短く見えた事は、これまでにただの一度もない。時によると、苦心すればするほど、かえって長く見えるような?さえした。内供は、こう云う時には、鏡を箱へしまいながら、今更のようにため息をついて、不承不承にまた元の?机（きょうづくえ）へ、?音?（かんのんぎょう）をよみに?るのである。

それからまた内供は、?えず人の鼻を?にしていた。池の尾の寺は、僧供講?（そうぐこうせつ）などのしばしば行われる寺である。寺の内には、僧坊が隙なく建て?いて、湯屋では寺の僧が日?に湯を沸かしている。?ってここへ出入する僧俗の類（たぐい）も甚だ多い。内供はこう云う人々の?を根?よく物色した。一人でも自分のような鼻のある人間を見つけて、安心がしたかったからである。だから内供の眼には、紺の水干（すいかん）も白の帷子（かたびら）もはいらない。まして柑子色（こうじいろ）の帽子や、椎鈍（しいにび）の法衣（ころも）などは、見慣れているだけに、有れども無きが如くである。内供は人を見ずに、ただ、鼻を見た。——しかし鍵鼻（かぎばな）はあっても、内供のような鼻は一つも見当らない。その見当らない事が度重なるに?って、内供の心は次第にまた不快になった。内供が人と話しながら、思わずぶらりと下っている鼻の先をつまんで見て、年甲斐（としがい）もなく?を赤らめたのは、全くこの不快に動かされての所爲（しよゐ）である。

最後に、内供は、内典外典（ないてんげてん）の中に、自分と同じような鼻のある人物を見出して、せめても幾分の心やりにしようと思つた事がある。けれども、目連（もくれん）や、?利弗（しやりほつ）の鼻が長かったとは、どの?文にも書いてない。勿論?樹（りゅうじゅ）や馬鳴（めみょう）も、人並の鼻を備えた菩薩（ぼさつ）である。内供は、震旦（しんたん）の話の序（ついで）に蜀漢（しよくかん）の劉玄?（りゅうげんとく）の耳が長かったと云う事を聞いた時に、それが鼻だったら、どのくらい自分は心細くなくなるだろうと思った。

内供がこう云う消極的な苦心をしながらも、一方ではまた、積極的に鼻の短くなる方法を試みた事は、わざわざここに云うまでもない。内供はこの方面でもほとんど出来るだけの事をした。烏瓜（からすうり）を煎（せん）じて飲んで見た事もある。鼠の尿（いばり）を鼻へなすって

見た事もある。しかし何をどうしても、鼻は依然として、五六寸の長さをぶらりと唇の上にぶら下げているではないか。

所がある年の秋、内供の用を兼ねて、京へ上った弟子（でし）の僧が、知己（しるべ）の医者から長い鼻を短くする法を教わって来た。その医者と云うのは、もと震旦（しんたん）から渡って来た男で、当時は長?寺（ちょうらくじ）の供僧（ぐそう）になっていたのである。

内供は、いつものように、鼻などは?にかけないと云う風をして、わざとその法もすぐにやって見ようとは云わずにいた。そうして一方では、??な口調で、食事の度?に、弟子の手数をかけるのが、心苦しいと云うような事を云った。内心では勿論弟子の僧が、自分を?伏（ときふ）せて、この法を試みさせるのを待っていたのである。弟子の僧にも、内供のこの策略がわからない筈はない。しかしそれに?する反感よりは、内供のそう云う策略をとる心もちの方が、より強くこの弟子の僧の同情を動かしたのであろう。弟子の僧は、内供の予期通り、口を極めて、この法を試みる事を?め出した。そうして、内供自身もまた、その予期通り、結局この熱心な?告に??（ちょうじゅう）する事になった。

その法と云うのは、ただ、湯で鼻を茹（ゆ）でて、その鼻を人に踏ませると云う、極めて簡?なものであった。

湯は寺の湯屋で、?日沸かしている。そこで弟子の僧は、指も入れられないような熱い湯を、すぐに提（ひさげ）に入れて、湯屋から汲んで来た。しかしじかにこの提へ鼻を入れるとなると、湯?に吹かれて?を火傷（やけど）する惧（おそれ）がある。そこで折敷（おしき）へ穴をあけて、それを提の蓋（ふた）にして、その穴から鼻を湯の中へ入れる事にした。鼻だけはこの熱い湯の中へ浸（ひた）しても、少しも熱くないのである。しばらくすると弟子の僧が云った。

——もう茹（ゆだ）った時分でござろう。

内供は苦笑した。これだけ聞いたのでは、誰も鼻の話とは?がつかないだろうと思ったからである。鼻は熱湯に蒸（む）されて、蚤（のみ）の食ったようにむず痒（がゆ）い。

弟子の僧は、内供が折敷の穴から鼻をぬくと、そのまだ湯?の立っている鼻を、?足に力を入れながら、踏みはじめた。内供は横になって、鼻を床板の上へのぼしながら、弟子の僧の足が上下（うえした）に動くのを眼の前に見ているのである。弟子の僧は、時々?の毒そうな?をして、内供の禿（は）げ頭を見下しながら、こんな事を云った。

——痛うはござらぬかな。医師は責（せ）めて踏めと申したで。じゃが、痛うはござらぬかな。

内供は首を振って、痛くないと云う意味を示そうとした。所が鼻を踏まれているので思うように首が動かない。そこで、上眼（うわめ）を使

って、弟子の僧の足に?（あかぎれ）のきれいているのを眺めながら、腹を立てたような声で、

——痛うはないて。

と答えた。?際鼻はむず痒い所を踏まれるので、痛いよりもかえって?もちのいいくらいだったのである。

しばらく踏んでいると、やがて、粟粒（あわつぶ）のようなものが、鼻へ出来はじめた。云わば毛をむしった小鳥をそっくり丸灸（まるやき）にしたような形である。弟子の僧はこれを見ると、足を止めて独り言のようにこう云った。

——これを鑷子（けぬき）でぬけと申す事でござった。

内供は、不足らしく?をふくらせて、?って弟子の僧のするなりに任せて置いた。勿論弟子の僧の親切がわからない?ではない。それは分っても、自分の鼻を まるで物品のように取扱うのが、不愉快に思われたからである。内供は、信用しない医者の手術をうける患者のような?をして、不承不承に弟子の僧が、鼻の毛 穴から鑷子（けぬき）で脂（あぶら）をとるのを眺めていた。脂は、鳥の羽の茎（くき）のような形をして、四分ばかりの長さにぬけるのである。

やがてこれが一通りすむと、弟子の僧は、ほっと一息ついたような?をして、

——もう一度、これを茹でればようござる。

と云った。

内供はやはり、八の字をよせたまま不服らしい?をして、弟子の僧の云うなりになっていた。

さて二度目に茹でた鼻を出して見ると、成程、いつになく短くなっている。これではあたりまえの鍵鼻と大した?りはない。内供はその短くなった鼻を撫（な）でながら、弟子の僧の出してくれる鏡を、極（きま）りが?るそうにおずおず覗（のぞ）いて見た。

鼻は——あの?（あご）の下まで下っていた鼻は、ほとんど嘘のように萎縮して、今は僅（わずか）に上唇の上で意?地なく残喘（ごんぜん）を保っている。所々まだらに赤くなっているのは、恐らく踏まれた時の痕（あと）であろう。こうなれば、もう誰も晒（わら）うものはないにちがいない。——鏡の中にある内供の?は、鏡の外にある内供の?を見て、?足そうに眼をしばたいた。

しかし、その日はまだ一日、鼻がまた長くなりほしないかと云う不安があった。そこで内供は誦?（ずぎょう）する時にも、食事をする時にも、暇さえあれば手を出して、そっと鼻の先にさわって見た。が、鼻は行儀（ぎょうぎ）よく唇の上に納まっているだけで、格別それより下へぶら下って来る景色もない。それから一?寝てあくる日早く眼がさめる

と内供はまず、第一に、自分の鼻を撫でて見た。鼻は依然として短い。内供はそこで、幾年にもなく、法華（ほけきょう）書写の功を積んだ時のような、のびのびした分になった。

所が二三日たつ中に、内供は意外な事を見した。それは折から、用事があって、池の尾の寺を訪れた侍（さむらい）が、前よりも一層可笑（おか）しそうな事をして、話も碌々（ろくろく）せずに、じろじろ内供の鼻ばかり眺めていた事である。それのみならず、かつて、内供の鼻を粥（かゆ）の中へ落した事のある中童子（ちゅうどうじ）などは、講堂の外で内供と行きちがった時に、始めは、下を向いて可笑（おか）しさをこらえていたが、とうとうこらえ兼ねたと見えて、一度にふっと吹き出してしまった。用を云いつかった下法師（しもほうし）たちが、面と向っている間だけは、慎（つつし）んで聞いていても、内供が後（うしろ）さえ向けば、すぐにくすくす笑い出したのは、一度や二度の事ではない。

内供ははじめ、これを自分の事がわりがしたせいだと解した。しかしどうもこの解だけでは十分に明がつかないようである。——勿論、中童子や下法師が哂（わら）う原因は、そこにあるのにちがいない。けれども同じ哂うにしても、鼻の長かった昔とは、哂うのにどことなく容子（ようす）がちがう。見慣れた長い鼻より、見慣れない短い鼻の方が滑稽（こっけい）に見えると云えば、それまでである。が、そこにはまだ何かあるらしい。

——前にはあのようにつけつけとは哂わなんだて。

内供は、誦（ず）しかけた文をやめて、禿（は）げ頭を傾けながら、時々こう（つぶや）く事があった。愛すべき内供は、そう云う時になると、必ずぼんやり、傍（かたわら）にかけた普賢（ふげん）の画像を眺めながら、鼻の長かった四五日前の事を憶（おも）い出して、「今はむげにいやになりさがれる人の、さかえたる昔をしのぶがごとく」ふさぎこんでしまうのである。——内供には、遺憾（いかん）ながらこの間に答を与える明が欠けていた。

——人間の心には互に矛盾（むじゅん）した二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しない者はない。所がその人がその不幸を、どうにかして切りぬける事が出来ると、今度はこっちで何となく物足りないような心もちがする。少し誇張して云えば、もう一度その人を、同じ不幸に（おとしい）れて見たいような事にさえなる。そうしていつの間にか、消極的ではあるが、ある敵意をその人にして抱くような事になる。——内供が、理由を知らないながらも、何となく不快に思ったのは、池の尾の僧俗の態度に、この傍者の利己主義をそれとなく感づいたからにほかならない。

そこで内供は日々に機嫌（きげん）がなくなつた。二言目には、誰でも意地なく叱（しか）りつける。しまいには鼻の療治（りょうじ）をしたあの弟子の僧でさえ、「内供は法慳貪（ほうけんどん）の罪を受けられるぞ」と陰口をきくほどになつた。殊に内供を怒らせたのは、例の（いたずら）な中童子である。ある日、けたたましく犬の吠（ほ）える声がするので、内供が何もなく外へ出て見ると、中童子は、二尺ばかりの木の小片（きれ）をふりまわして、毛の長い、（や）せた尨犬（むくいぬ）を逐（お）いまわしている。それもただ、逐いまわしているのではない。「鼻を打たれまい。それ、鼻を打たれまい」と囁（はや）しながら、逐いまわしているのである。内供は、中童子の手からその木の片をひたたくって、したたかそのを打った。木の片は以前の鼻持上（はなもた）げの木だったのである。

内供はなまじいに、鼻の短くなつたのが、かえって恨（うら）めしくなつた。

するとある夜の事である。日が暮れてから急に風が出たと見えて、塔の風鐸（ふうたく）の鳴る音が、うるさいほど枕に通（かよ）つて来た。その上、寒さもめつきり加わつたので、老年の内供は寝つこうとしても寝つかれない。そこで床の中でまじまじしていると、ふと鼻がいつになく、むず痒（かゆ）いのについた。手をあてて見ると少し水（すいき）が来たようにむくんでいる。どうやらそこだけ、熱さえもあるらしい。

——無理に短うしたで、病が起つたのかも知れぬ。

内供は、前に香花（こうげ）を供（そな）えるような恭（うやうや）しい手つきで、鼻を抑えながら、こういつた。

翌朝、内供がいつものように早く眼をさまして見ると、寺内の銀杏（いちよう）や椽（とち）が一の中（いち）の中に葉を落したので、庭は黄金（きん）を敷いたように明るい。塔の屋根には霜が下りているせいであろう。まだうすい朝日に、九輪（くりん）がまばゆく光っている。禅智内供は、蔀（しとみ）を上げたに立って、深く息をすいこんだ。

ほとんど、忘れようとしていたある感（か）が、再び内供にいつて来たのはこの時である。

内供は慌てて鼻へ手をやった。手にさわるものは、昨夜（ゆうべ）の短い鼻ではない。上唇の上から（あご）の下まで、五六寸あまりもぶら下っている、昔の長い鼻である。内供は鼻が一夜の中に、また元の通り長くなつたのを知つた。そうしてそれと同時に、鼻が短くなつた時と同じような、はればれした心もちが、どこからともなくいつて来るのを感じた。

——こうなれば、もう誰も哂（わら）うものはないにちがいない。

内供は心の中でこう自分に囁（ささや）いた。長い鼻をあげ方の秋風
にぶらつかせながら。

大正五年一月

Loved this book ?
Similar users also downloaded

Ryūnosuke Akutagawa

藪の中 (*yabu no naka*)

"In a Grove" is an early modernist short story consisting of seven varying accounts of the murder of a samurai, Kanazawa no Takehiro, whose corpse has been found in a bamboo forest near Kyoto. Each section simultaneously clarifies and obfuscates what the reader knows about the murder, eventually creating a complex and contradictory vision of events that brings into question humanity's ability or willingness to perceive and transmit objective truth. It is the basis for Kurosawa's "Rashoumon."

『藪の中』（やぶのなか）は、芥川龍之介の短編小説。1922年（大正11年）、月刊雑誌「新潮」1月号に掲載された。

(from Wikipedia)

Note: you may have to embed your own Japanese unicode font in order for this to display on your reader.

A translated version is available: <http://www.feedbooks.com/book/4205>

Ryūnosuke Akutagawa

羅生門 (*rashoumon*)

"Rashōmon" (Japanese: 羅生門) is a short story by Akutagawa Ryūnosuke based on tales from the *Konjaku Monogatari*. A man considering whether or not to become a thief meets a woman stealing hair from corpses. Their conversation explores the morality of theft.

The story was first published in 1915 in *Teikoku Bungaku*. Despite its name, it provided no direct plot material for the Akira Kurosawa movie *Rashōmon*, which was based on Akutagawa's 1921 short story, *In a Grove*.

『羅生門』（らしょうもん）は、芥川龍之介による初期の小説。
『今昔物語集』の「羅城門登上層見死人盗人語第十八」を題材にした短編小説。羅生門とは、朱雀大路にある平安京の正門のことである。正しくは羅城門であるが、人間の生を意識してあえて「羅生門」にしたと考えられている。高校教科書などでも採用され、よく知名度がある。

(source: Wikipedia)

Note: You may have to embed your own Japanese unicode font in order for this to display on your reader.

An English version is available on Feedbooks at: <http://www.feedbooks.com/book/4254>



www.feedbooks.com
Food for the mind